

満一年頃の兒童に立派な觸覺練習が出来る。否自らやりつゝあるのである。これを系統立てるのは固より結構であるが、知識教育の準備として學齡を超えた兒童に初歩的觸覺練習をやるモンテッソリ式心酔者には感服が出来ない。正常の兒童では一歳前後から自らやつて居る。その時にこれを導かねばならない。痴兒教育でこそ成長した者をつかへまで感官の練習から始めなければならぬ。小學校に於て初歩的觸覺練習をやるとは以ての外である。これは一歳頃からの注意で澤山である。最もこれは知育の準備としての教育についてであつて技藝的堪能の教育は固より別である。かくして吾人はこの第一期に於て感官の練習に機會を與

### 『ジエーン・アイア』(三)

|| 英文學にあらはれたる子供(十四) ||

東京女子高等師範學校教授 岡田みづ

次にジエーンの記憶に印して居る事は、恐い夢

て導いて行くことの必要を唱ふるものである。次に躑なり習慣を與へる事については自由主義者否放任主義者は大に反對するであらう。併しなからこれも決して無理なことでは無い。ルッソオでさへも自然的の欲望と想像的の欲望とは區別して後者は幼時から許すなといつて居る。幼時に放任して急に矯正しやうとするのは大人の矛盾である。とロックはいつて居る。固より發達段階を考慮に入れて無理な注文をしてはならないが、身體的の習慣は實にこの第一時期にも可能であつて、教養保育の任に當るものは此の時代から相應して善良なる躑けを與へる事を忘れてはならない。

恐ろしい光るものに、黒い棒が格子に嵌つて居るのとであつた。人聲も耳に入つたが、風だか波だかの響に包まれた太い洞聲うらごゑに聞こえた。つまり、苦惱と、不安と、萬事を忘れさせる程の恐怖の念とが、心の働を亂して居たのだ。暫くあつて、ジエーンは誰か、自分に手を掛け、抱き起こして坐らせて呉れるのに氣が付いたが、取扱ひの手柔かな事は、嘗て覺えが無い程であつた。ジエーンは、枕だか人の腕だかに凭り掛つて、樂になつた氣持がした。

五分も経つと、惑ひの雲が晴れて、ジエーンは、自分がベッドの上に居て、赤い光りは、暖爐の火だと解つた。丁度夜で、燭燭が卓子の上に置いてあつて、ベシーが手に水鉢ペイジンをもつて床の下手ペッドしもてに立つて居ると、男の人が自分を覗き込みながら、枕邊の椅子に坐つて居る。

ジエーンは、言ひ知らぬ心安さを覺えた。見知らぬ人——此家の人でない人——リード夫人の親

族でない人——が此部屋に居るからには、この人の庇護を受け、我身は安泰だとの慰藉を得たからで、ベシーを見て居た目を移して、その男の人の顔を飽くまでも熟視した。其人は、ロイドといふ藥劑師で、以前から、ジエーンの知つてゐる人であつた。リード夫人は、召使共に病人があると、時々此人を頼むので、自分や子供の病わづい時は、本當の醫者を招くのであつた。

「私は誰です。解りますか。」とロイド君は尋ねた。ジエーンは其名を言つて、同時に手を差し伸べた。

ロイド君はその手を取つて、莞爾ニヒクしながら、「いまによく成りますよ。」と言つた。

其から、ジエーンを横にして、ベシーに、よく氣を付けて夜中病人の心を亂さぬやうにと命じ、尙二三の指圖をして、翌朝來診するとの旨を告げて、悲しや、ロイド君は歸つて終つた。この人が枕元に居て呉れる間は、回護かほつて貰へるやうな氣分

だつたのに、此人の姿が戸の彼方に行つてしまつた時には、部室が暗くなつて、氣が沈んで、何とも言へぬ悲哀の情が壓迫して來た。

「眠られさうに御思ひなすつて、ジエーンさん。」とベシーが幾分やさしく尋ねた。

ジエーンは、答に躊躇した——次のベシーの言葉が荒くはあるまいかとの心配で、

「どうだか眠つて見やう。」

「何か御飲みなさりたいものか、召し上りたいものがありますか。」

「否。」

「では私就寝しますよ。もう十二時過ぎですから。

もし何か御用でしたら御起しなさいませ。」

これは又何といふ丁寧な事だろうと思つて、ジエーンは、大膽に問ひを掛けた。

「ベシーや、一體私はどうしたの。病氣なの。」

「赤室で御泣きなすつた爲で、病氣御成りので

せうが、直に快癒しますよ。必然。」

と言ひ捨て、間近の女中部室へ入つたが、

「セーラさん、あの部室へ來て一所に寝て下さいな。」

到底今夜は、一人で、あの御子と一所には居られない。あの人は死ぬかも知れませんが、あんなに氣絶するなんて不思議だね。何か恐いものでも見えたのか知らむ。奥さんがあんまり酷いので。」

と言つてゐるのが聞えた。セーラはベシーと一所に入つて來て、二人とも床に就いたが、眠るまでに三十分位ひそ／＼話をしてゐた。其對話が斷片的にジエーンの耳に入つたのだが、何の話をしてゐるのだから、分りすぎる程によく解つた。「何だか白い衣物を着たものが前を通つて、すつと消えたのですと。」「大きな黒い犬を後に連れてね。」部室の戸を三度強く叩いて「あの方の墓石の上に光るものが見えたな」と言ふのであつた。

やつと二人とも眠り付いた。暖爐の火も、蠟燭

の火も消えて終つた。併し、ジエーンは不氣味さに、耳も、目も、心も、力が張りつめてしまつて其長の夜を眠り付かれないで過した。そんな恐れ方は、子供でないでは出来ないのである。

翌日晝前に、ジエーンは床を離れ、着物を代へて、子供部屋の暖爐の前に、シヨールに包まれて坐つた。體に力がなく、委頓した気分だつたが、身體よりも心に言ひ知らぬ情ない思ひのあるのもつと辛かつた。——唯情なくて、涙が溢れ出るごとく、言つたら止度なしで、一零拭ふとすぐ後のが落ちて來るのであつた。

一體ならば、悦んでゐる筈なのに、ジエーンは思つた。リード家の人は、皆馬車へ乗つて出掛けて留守であるし、アボットも、他の室で縫物をして居て、唯ベシーばかりが、玩具を仕舞つたり、抽出しを片付けたりして、彼方此方動き廻はつて、時々珍らしくも、優しい言葉を自分に掛けて呉れるのであるから、今迄始終こき使はれて、止む間

なしの小言を聞いてゐた身の上に比べれば、極樂世界の心地がしさうなのに、神經の疲れ惱んでゐる身には閑寂の境も慰めとならず、興ある事も刺戟の種にはならぬのであつた。

ベシーは、臺所に下りていつて、皿に御菓子を載せて持つて來てくれた。其皿は極彩色で薔薇や何かの花の中に、風鳥が止まつて居る畫が畫いてある、ジエーンのいつも奇麗だと歎賞してゐる品であつた。其を手にとつて、よく見させてと屢々乞ふても、あなたのやうな人にとの一言で、撥付けられてしまつてゐたのだが、今其貴重な皿を、ベジーが膝の上に載せて呉れて、その中の御菓子をお上りなさいと勸めて呉れる。併し折角の親切も、今となつては効力なしで、ジエーンは、食べやうとしても食慾なく、鳥の羽も花の色も色が褪せたやうで見るに堪へかねて、其儘押しやつて終つた。ベシーは、書物でも上げませうかと言つて呉れた。本と言はれて一寸氣が進んで「ガリバー

の島廻り」を取つて來てと頼んだ。此本は、前には繰り返し／＼面白がつて讀んだもので、中の話を事實だと信じきつて居たので、いつかは、自分も船に乗つて、ガリバーの經廻つた小人島、に行つて見られると思つて居た。扱その本を今手にして見ると、面白いどころか、氣味の悪い、異様の畫ばかりで、ガリバーといふ人も、厭な恐ろしい土地を漂浪へ歩いてゐる、氣の毒な人間と思はれなかつたので、書物をはたと閉ちて、之も、亦卓子の上に押しやつてしまつた。

ベシーは部屋の取片付を終り、手を洗つて、一つの抽出しを明けて、中から絹や縞子の小切を持ち出して、デョーリアナの人形にと、帽子を製り始め、而して縫ひながら歌を唱ひ出した。その歌はジエーンは前にも度々聞いた歌で、子供心にベシーは美しい聲だと思つたので、嬉しがつて聞いたのだ。其れが、今は聲に變りはないのだが、節が哀しく聞こえ、殊にベシーが仕事に氣を取られて、

疊句の部を、細く、緩く歌ふと、それが全然葬式の時の歌のやうな悲哀の調子に響いた。歌ひ終つてベシーは、

「あれ、ジエーンさん、御泣きなさるなよ。」と言つたが、それは、火に燃えるなど言ふのと同様の注文であつた。併しベシーに、如何してジエーンの病的の心の苦悶が解ろうぞ。

晝飯前にロイド君が見えて、室へ入りながら、「オヤ、もう起きたのですね！ 乳母さん、どんな様子です。」と尋ねた。

「ベシーは、病人は工合が宜いらしいと答へた。それなら、もつと元氣がありそうなものだに。ジエーンさん、此方へ。ジエーンといふ御名でしたね。」

「えい。ジエーン・アイアです。」

「あなた、泣いて居ました。何を泣いて御出のでした。苦しいところがありますか。」

「いゝえ。」

「皆さんと御一所に、馬車で出られないので、泣いていらつしやるのだと存じますよ。」とベシーが横合から口出した。

「まさかそんな詰らぬ事に泣く年ではありませんね。」

「ジエーンも真にそうだと思ひ、ベシーによい加減な言掛けを言はれて、自尊心を傷けられたのが口惜しくて、

「そんな事で泣いた事は未だありません。馬車で出るの大嫌ひ。私や辛く悲しいから泣くの」と敏速と答へた。

「まあ、ジエーンさん」とベシーが言つた。

「藥劑師は惑つたらしく、前に立つてゐるジエーンを熟々と見て、

「如何して昨日病氣になつたのです。」

「御轉倒なすつたのですの」とベシーが、再言葉を挾んだ。

「轉倒ぶ！又しても赤ン坊見たやうではありません

せんか。」「其年頃で、歩けないのですか。八歳か九歳でせう。」

「轉ばされたのです」とジエーンは、又も辱めを受けたのが忌々しくて、膠もなく辨解の句を弾き出すやうに言つて「でも、そんな事で病氣になりはしません」と言ひ添へた。ロイド君は嗅烟草を一撮取り出して、鼻へ持つていつた。而して烟草の箱を衣嚢へ戻す途端に、召使共の食事の鐘が響いた。ロイド君は、それと心付いて、

「あれはお前さん方のだね。下へ行つて宜しい。御前さんが来るまで、ジエーンさんによく言ひ聞かせておくから」と言つた。

ベシーは、其處に居たさうだつたが、此邸では食事の時間が非常に厳しいので、止むなく下りていつた。

「轉んだ爲の病氣でないとする、何で病くなつたのです」と、ロイド君は前の續きを追ふた。

「お化けの出る部室へ、暗くなる迄押し込められ

て居たの。」

ロイド君は笑顔と鬘しかつ顏とを同時に見せて、

「お化け！ やつぱりあなたは赤ン坊ですね。お化けが恐いの。」

「リード伯父さんのお化けは恐いのよ。伯父さんは、あの室で死んで、あすこに置いてあつたのでせう。ですから、ベシーだつて誰だつて夜は、成丈、あすこへ行かぬやうにして居るのに、私をあすこへ入れるなんて眞ほんに非道い。たつた一人で、而して燈火あかりもないンですもの。あんまり非道いから、一生忘れやしない。」

「馬鹿な！ 辛く悲しくつてといふのは、其でなのですね。今此の晝間でも恐いかね。」

「いゝえ。ですけれど、今に又直ちきに夜になりますの。而して、おまけに私や不幸なの——ほんとに不幸なの——他の事で、」

「他の事ツてどんな事？ 少し話して御覽なさいな。」

ジエーンは返答がしたくて堪らなかつた。が、何と答へてよいか困却した。子供といふものは、感じて、その感じを分解することが出来ない。

よしや幾分分解する事が出来ても、其結果を言語に言ひ表はす術すべを知らない。併し、ジエーンは、人に告げて、自分の心の苦を減らす此唯一の好機會を免すまいとの一心で、暫時どぎまぎした揚句に、一の答を——言ひ足らぬながらも偽りのない返答を——案じ出した。

「一つには、父さんも、母さんも、兄弟もないから。」

「優しい伯母さんと、従兄弟いとこがありません。」

ジエーンは一寸黙したが、又無細工ぶさいくに陳述した。

「でも、ジョンが私を轉ばせて、伯母さんが赤室へ押し込めたのですよ。」

ロイド君は再、烟草を引出した。

「此家は立派でせう。こんな家に居るのは、結構ではありませんか。」

「でも、私の家ではありませんもの。アボットは私は女中よりも下等で、到底こんな家には居らぬのだつて言ふんです。」

「何だそんな事？こんな立派な家を、出たいなんていふ詰らない事を、思ひはしないでせう？」

「他に行き處があれば、嬉しがつて行きますけれど、大人になるまでは、此處を出られないの。」

「出られるかも知れない——其は分らない。此家の奥さんの他に、あなたの親類がありますか。」

「いゝえ。無いでせう。」

「あなたの御父さんの方のもの。」

「知りません。先に伯母さんに伺つたら、アといふ貧乏な、下等な親類があるかも知れないが、一向知らないと仰つたのです。」

「若し、さういふ親類があつたら、其處へ行きたいと思ひますか。」

「ジエーンは考へた。貧困は大人にも不快なも

のだが、子供には猶更で、子供は勤勉な労働社界の感ずべき貧のあるのを知らず、貧しいといふ語は、直ちに破れ衣、不足の食物、火のない爐、下劣な舉動、厭はしい悪行を連想させるのである。ジエーンには、貧困は墮落と同じ意味に思はれるので、

「いゝえ。貧乏な人の處へは行きたくないの」と答へた。

「いくら親切にして呉れても、」

ジエーンはやはり首を振つた。貧窮の人はどうして親切な事が出来やう！且又、貧乏の人の口のきき方を覚え、その人達の行儀を真似て、教育もされず、子供の守だの洗濯だのをしてゐる此村の御かみさん達のやうになるのは——否や、地位といふ高價を拂つてまで、自由を買ふ勇氣はないと考へた。

「あなたの親類つてそんなに皆貧しいのですか。労働者なの？」

「どうですか。伯母さんは、若し、私に身内があれば、乞食に近いやうな者に違ひないと仰るの。私や乞食には、なりたくない。」

「では、學校へ行くのは如何です。」

ジエーンは再び考へた。學校とはどんな處だか一向知らない。若い女の人が、足枷をはめて、後板をつけて、上品に堅苦しくしてゐる處だと、ベシーが話してくれた事がある。而してジョン、リードは學校が嫌ひで、先生を悪く言ふが、ジョンの嗜好が自分のと同じ譯もない。ベシーの話は何か恐ろしいけれども、又生徒が種々の技藝を習ふのだといふから、其點は面白さうでもある。ベシーの以前奉公してゐた家の娘さん達は、景色や、花の畫を上手に畫き、歌も唱へるし、樂器も弾けるし、御金入も編めるし、佛語の本も讀めると、ベシーが自慢して聞かせるので、自分は羨ましくて堪らなかつた事がある。其上に、學校へ入るのは、全然違つた處へ行くので、長い旅をする譯で

あるから、この家とはすつかり離れて、新しい生活に入るのだ——と思ひ定めて、いよくの斷定を言葉に現はして、

學校へなら行きたう御座います。」と言つた。

「さうか、さうか。そんな事が出来るかも知れませんよ。」と言つて、ロイド君は立ち上り、此子には氣を換へさせる必要がある。神經がどうかしてゐる。」と獨語して居た。

ベシーは、戻つて來た。其と同時に、馬車の音が砂利道に轟いた。

「あれは、奥さんですか」とロイド君は尋ねた。「歸りに一寸御話したいから。」

ベシーは先に立つて案内した。

ロイド君とリード夫人との會見で、ロイド君がジエーンを學校へ遣つてはと言ひ出して見たところ、夫人が造作なく同意したらしく、アボットがある夜、子供部屋へ來て、縫物をしながら、ベシーと其事を話してゐた。

(床にゐるジエーンはもう眠つて居ると思つて)

「えい。奥さんはあんな厭いやな子の厄介拂をするのですもの大悦びでサ。あの子ツてね、始終人の瑕あざを探して、蔭で何か企圖たくらみでゐるやうな風ですよ。」

ジエーンは、アボットの口から、自分の父は貧しい牧師で、母は一族の望みに背いて、此人に嫁した爲に、母の父は怒つて、一文もんの金もやらずに追出してしまつた事や、父と母とが結婚してから一年後に、父はある盛な工業地の貧民窟を訪問してゐるうちに、其地に流行してゐたチブスに傳染した事、母がまた同じ病に罹つて、兩人とも一ヶ月を隔てずに病歿した事などを、始めて聞き知つた。

「ベシーは、この物語を聞き了つて、歎息して、  
「ジエーンさんだつて、可愛いさうだね、アボットさん。」と言つた。

「え。あの子が良い、奇麗な子なら不仕合を哀

んでやつてもよいけれど、あんな子を可愛い、なんと思はれやしません。」

「それや、ひどく可愛い、事はないさ。あれがデョーシアナさんのやうな美しさで、今の境遇にゐるのだと、もつと哀れが深いのですがね。」

「そうですよ。私や、デョーシアナさんは實に可愛いと思ふ。縮毛が長くて、碧眼あざめで、而してあの顔色の美しさ、畫にかいたやうですもの——ベシーさん御夕飯の御馳走の匂がする。」

「ほんとうにね。さ、行きませう。」

二人は出て行つた。

## 今日の常會

今月の常會には本誌廣告の通り巖谷小波氏の有益にして趣味多きお話があります。本會はお一人でも多くの方に益を頒ち度いと思ひますから、皆様お誘ひなまつてお出で下さい。